

文化遺産における生活・アート・観光

——マレーシア・ジョージタウンを事例として——

立教大学大学院観光学研究科 鍋倉咲希

1 目的

本報告の目的はマレーシア・ペナン州の世界文化遺産ジョージタウンを対象に、観光の視点から文化遺産制度下における地域住民の生活の実践について考察することである。

現代において観光は「博物館学的欲望」(荻野 2002)を展開し強化する重要な要素のひとつになっている。従来の文化遺産に関する社会学・人類学的研究において、観光は「遺産の消費システム」の代表として扱われてきた。観光の論理が地域に浸透すると、地域住民の生活は疎外され場所のリアリティは喪失する。また、文化遺産の物語は固定化され商業的性格を帯びる。

しかし、ここには2つの問題を指摘することができる。すなわち(1)地域住民と観光が「生活(生産) - 余暇(消費)」, 「内部 - 外部」のように対比的に描かれ、両者が融解する様相が等閑視されていること、(2)観光の論理が文化遺産の場に浸透する状況について、負の側面が強調されてきたことである。本報告では観光の創造的側面と、文化遺産観光を生きる地域住民の実践を明らかにする。

2 方法

本報告のデータは、報告者が2015年3月から2016年9月にかけて4度行った、ジョージタウンの町歩き観光(世界遺産観光, ストリートアート観光)に関する現地調査(計2か月程度)によるものである。現地では、ストリートアートを設置している観光事業者(飲食店・土産物屋など)やジョージタウンで毎年行われるアートフェスティバル George Town Festival (以下 GTF) の運営者、遺産保護を活動目的とする NPO の職員、非観光産業従事者に聞き取りを行った。

3 結果

ジョージタウンは多文化が混在する歴史的町並みが評価され、2008年に世界文化遺産に登録された。その後、世界遺産登録を祝すために始まった GTF の2012年の企画において、コアゾーンにストリートアートが設置された。そして2013年から観光事業者がそれを真似し、自店舗の壁にストリートアートを非合法に設置するようになった。2015年以降はアートを中心とした観光産業がますます活発化し、2016年8月には80以上の作品がコアゾーンにみられる。ストリートアートは観光客のまなざし(Urry and Larsen 2011=2014)を受け、観光と相互に影響し合い発展している。

一方、GTF や NPO はアートと観光の過度な発展を消費主義的だとして批判する。たしかに非合法のアート設置は、文化遺産を壊し地域を商品化する逸脱行為に見える。しかし現地調査から、住民は文化遺産制度や観光に対し適応も抵抗もせず、曖昧な立場にいることが明らかになった。

4 結論

地域住民はストリートアートを手段として「観光」に身を委ねつつ、アートと文化遺産という既存の制度を脱色させ、自らの生活をよりよくしようと試みている。彼らは「世界遺産であることは誇りである」と述べながら、ストリートアートを世界遺産の壁に設置する。しかし、その矛盾は演技や嘘ではなく、どちらも彼らの生活の「リアル」である。彼らは文化遺産制度や観光産業の浸透に抵抗するわけではなく、それらを緩やかな同意のなかで利用する。つまり観光の論理が浸透した先に見えるのは、生活者の一元的な疎外ではなく、生活と観光を統合させ生きる人々の姿なのである。

参考文献

荻野昌弘編, 2002, 『文化遺産の社会学——ルーブル美術館から原爆ドームまで』新曜社。

Urry, John and Jonas Larsen, 2011, *The Tourist Gaze 3.0*, London: Sage. (=2014, 加太宏邦訳, 『観光のまなざし 増補改訂版』法政大学出版局.)